

Ⅱ. 荒神宮参上神社

1 はじめに

「荒神信仰」の成り立ちは中世の神仏習合や修験道、陰陽師などの関与でやや複雑ですが、一般的には火の神、竈の神で、地域の守り神としての性格を持っていることが多いようです。諏訪形の「荒神さん」も「竈の神様」として、家々や村の守護神、作物の神様として信仰されてきています。



諏訪形の「荒神宮参上神社」は、地元では「荒神さん」と呼ばれ、地域の人々のみならず、多くの人々からの信仰を集めてきた神社です。ここでは、この「荒神さん」の歴史や「荒神さん」に残る文化財などについて見てみたいと思います。なお、荒神宮の祭神は建速須佐乃雄命（たけはやすさのおのみこと）、合殿神は興津比古命（おきつひこのみこと）と興津比売命（おきつひめのみこと）です。『古事記』では興津比古命と興津比売命は兄妹で、日常の食べ物を煮炊きし、命をつなぐのに大事な竈を司る神とされています。

2 荒神宮の縁起についての物語とその実際

（1）荒神宮の創建者

荒神宮の創建についてはよくわかっていません。『諏訪形誌』272ページには以下のように記載されています。

荒神宮に伝わる『荒神宮の由来』という文書（注：この文書は本稿文末に資料として添付してあります）によれば、中原兼遠の子に今井豊成という人物がいて、丸子依田城の義仲挙兵に際して荒神宮に派遣され、武運を祈願したとされています。今井豊成について詳細は不明ですが、今井四郎兼平の弟ということになるでしょう。

『荒神宮の由来』はさらに、木曾義仲敗死後、巴御前が尼となって荒神宮を訪れ、一族の者に挙兵以来の始末を物語ったと伝えています。以来、荒神宮の神職は、代々今井家が継承し、今日に至っています。このような経緯から、今井四郎兼平の碑が荒神宮境内に建てられたものと考えられます。

この記述に出てくる『荒神宮の由来』とは、1985（昭和60）年に当時の荒神宮30代別当今井武雄さん（1898（明治31）年～1995（平成7）年）によって書かれた文書を指すものです。今井武雄さんは上水内郡中条村（現在の長野市中条地区）出身で、荒神宮の別当に迎えられた人です。『荒神宮の由来』には以下のような記述があり、『諏訪形誌』の記載はこれに依ったものと思われる。

【荒神宮の由来（抜粋）】

本社創建は不詳であるが、治承四年夏木曾義仲は、高倉宮以仁王の命旨を承り平家追討の義兵を当国依田の里に挙げた時、木曾に住む中三権守中原兼遠は一族を引具してこれに應じて、出陣のときその子今井蔵人に木曾義仲の荒神像を託して、木曾一門の武運を祈らしめた。

注：この『荒神宮の由来』という文書の中には「第25代別当今井兼春の記す由来記による」という記載がありますが、同じく今井武雄さんが残した『荒神宮別当今井家系略記』では、25代別当は「今井隼之介」となっており、「今井兼春」という名の「別当」は記載されていません。このように、今井武雄さんの残した文献には若干の揺らぎがあり、史料としては要注意なのかもしれません。

この文書では「中原兼遠は自分の子に荒神像を託した」とあり、「豊成」の名前は出てきません。また、この文書によると、上の記述は『25代別当今井兼春の示す来歴記』と「木曾家後裔木曾源太郎著による『木曾公旧古実』」による、とされています。

さて、荒神宮30代別当今井武雄さんによる別の文書も存在します。荒神宮は1811（文化8）年の火災で建物や文書などのほとんどを失ってしまったわけですが、その時の第21代別当、今井隼人兼文という人によって書かれた『荒神宮別当今井家系略記』を、1988（昭和63）年に今井武雄さんが書き写したとされるものです。『荒神宮別当今井家系略記』では、荒神宮の創建について、次のように書かれています。

祖先 今井蔵人豊成
治承四年源義仲依田表出軍に従属したが有故て諏方形方に潜居して豎石と伴称す
後今井に復す今井兼平の二男、中三権頭の孫

この文書には「豊成」の名と今井兼平の二男、中原兼遠（中三権頭）の孫という記載があります。これが21代別当今井隼人兼文によって書かれたとするなら、江戸時代の後半には「荒神宮は今井兼平の子である今井豊成によって創建された」という言い伝えが成立していたことがわかります。ただし、この今井隼人兼文の手によるとされる文書の原本が存在するのかどうかについては現在確認中ですが、本稿執筆の時点では見つかっていません。

また、この『荒神宮別当今井家系略記』には第21代別当今井隼人兼文没後、30代別当今井武雄さんに至る荒神宮の歴史が書かれていますが、これは当然、今井武雄さんの手によるものと思われます。

これら史料では「荒神宮を開いた人物（今井豊成?）」について、『荒神宮の由来』とそれを引いた『諏訪形誌』では「中原兼遠の子（今井兼平の兄弟）」、『荒神宮別当今井家系略記』では「今井兼平の子（二男）＝中原兼遠の孫」とされています。両者の記載の間に若干の齟齬は見られますが、基本的には今井四郎兼平の兄弟または子どもが荒神宮に戦勝祈願を行った、と読むことができます。また現在に至るまで、荒神宮の宮司は代々、今井蔵人豊成の子孫が継いでいるということになります。

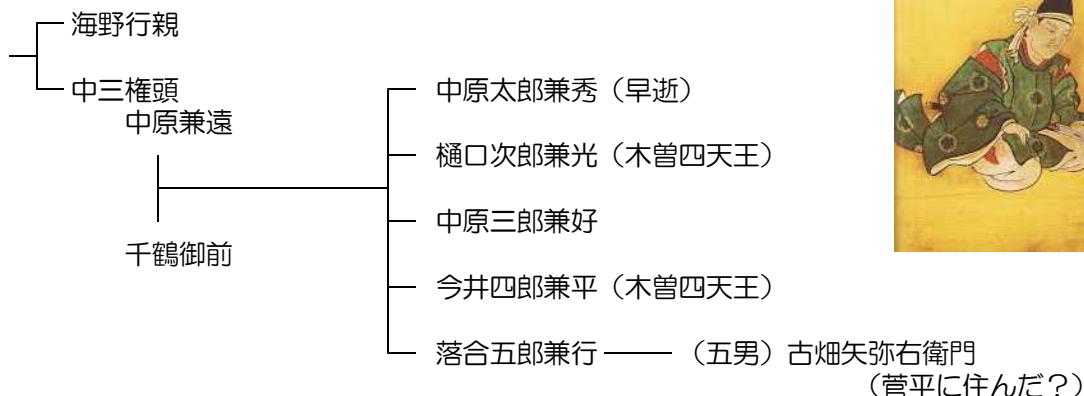
ただ、今井豊成という人物の名は中原兼遠の子の中には見当たりません。また、豊成は今井四郎兼平の子という説についても、やはり兼平の子どもたちの中に「豊成」の名は見当たりません。けれども、当時の婚姻関係などを考え合わせると、嫡子ではない人物がいたことも考えられ、豊成の存在を完全に否定することはできないのかもしれませんが、また、今井兼平の遺児を連れだ巴御前が荒神宮を訪れたという伝承もありますが、巴御前はその存在そのものに疑問のある人物ではありません。

（2）荒神宮初代別当「今井豊成」とは誰か

これまでに述べたとおり、荒神宮に関する文書からは、中原兼遠の子、または孫にあたる「今井豊成（とよしげ または とよなり）」という人物が荒神宮を創設し、以後代々「今井家が別当をつとめてきている」ということになります。今井武雄さんの残した文書によれば、現在（2025年）の別当今井貴美さんは、今井豊成から数えて32代目ということになります。ただ前述のとおり、いろいろな資料をあたって「今井豊成」という人物が見当たりません。中原兼遠の子どもたちについて調べてみると、概ね次のようになります。

中原兼遠の子孫

右は今井兼平像（徳音寺蔵 『源平合戦人物伝』より引用）



【コラム 巴御前】

中原兼遠の子とされる人たちの中で、「巴御前」という女性も有名です。各地に彼女に関わる伝説や墓所などがあり、荒神宮にも「木曾義仲没後に荒神宮を訪れた（『諏訪形誌』272ページ）」とされています。また、上田市富士山（東塩田地区）には巴御前の五輪塔もあります（『諏訪形誌』45ページ）。

その後巴御前は落ちのび、後に和田義盛に嫁いで義盛の子義秀を産んだという話も伝わっています（『源平盛衰記』）。しかし、和田（朝比奈）義秀の産まれたのは1176年で、木曾義仲が栗津の戦いで没した1184年よりも前であるため、事実としては疑わしいものと思われます。

巴御前の存在そのものは『吾妻鏡』などでは確認できず、当時の書状や日記の中にも登場しないということです。御前については『平家物語』と『源平盛衰記』で語られているだけということから、御前の存在そのものもかなり疑問ではあります。



巴御前像 メトロポリタン美術館蔵

前に述べたとおり、『荒神宮別当今井家系略記』では「今井豊成は今井兼平の二男」とされています。今井兼平の子どもたちについてわかっていることは以下のとおりです。

今井兼平の子孫

『諏訪形誌』などからの引用

兼平には三人の子どもが確認できています。長男、兼連の墓所は立科町芦田にあります。長野市御厨（長野市今井地籍の東隣の地区）にある今井山讃楽寺は次男兼之によって創建されました。また、三男の幼名熊丸は長野市鬼無里の山角城を築城したと伝えられています。

文献によると、義仲と兼平の死後、今井兼之（兼平の次男）らが巴御前と義仲の三男義基を匿って群馬県渋川市箱田に落ちのびたとされています。ただ、巴らが落ちのびた先は北陸地方である、という説もあるようです。また、巴の供養塔と伝えられている「五輪塔」が上田市富士山に建てられていることについては、『諏訪形誌』46ページでご紹介させていただいたとおりです。

長男 今井兼連…北佐久郡立科町芦田の「与惣塚」が兼連の墓所とされていますが異説もあり、真偽のほどは不明です。

与惣塚について

「与惣塚」について、『長野県北佐久郡立科町雨境峠祭祀遺跡群の踏査報告書（桐原健 1966（昭和41）年11月）』に以下のような記載があります。

木曾旭将軍義仲の臣今井四郎兼平と云う人あり、其身亀背の病にふして武門を辞し、人しらずにありけるに、君父栗津に討ち死にののち、冠者義重のあとを慕い、このところまできたり、辛苦せまり、病発りて落命しといふ、その旧墳あたりを与三殿原と云う。

『信濃国科山略伝記』

次男 今井兼之…現在の群馬県渋川市に落ちのびたとされています。次のような資料があり、この記述内容は後述の「群馬地域学研究所の手島仁さんからの情報」とも整合性があるように思われます。

元暦元（1184）年の「栗津の戦い」で木曾義仲と今井兼平が戦死すると、兼平の次男今井兼之・高梨・楯・根井・町田・小野沢・萩原・串刈・諸田等が義仲の三男木曾義基を匿い、群馬県渋川市北橘村箱田に落ち延びたという話も伝わっています。ただし、木曾義基の存在については疑義もあるようです。また、「木曾義基は木曾義仲と巴御前の間の子」という話が『岐蘇古今沿革志（1890（明治23）年 武居正次郎著）』に出てきますが、かなり怪しい説というのが通説のようです。

これらの義仲に関わりのある人たちが、義仲の崇敬社である岡田神社、沙田神社、阿禮神社の分霊を勧請し木曾三社神社・木曾三柱神社を創建、箱田に住居を構え、後に箱田城を自ら築城し、箱田地衆（国衆）として活動しました。また、戦国時代に入ると有力大名である白井長尾家、上杉氏、武田氏、北条氏、酒井氏、松平氏に仕えました。（出典：Wikipediaなど）

群馬地域学研究所の手島仁さんからの情報

…諏訪形誌を拝見し、今井四郎兼平が出てきました。一族の者は群馬県へ落ち延び、前橋市に隣接する旧北橋村下箱田（現在の渋川市）に土着しました。同地に今井一族が住んでおり、本家、木曾神社、醸造業などを営んでいます。群馬県内の今井姓はその末裔であると言われています。（『諏訪形誌 web版』のアドレスに届いたメール）

三男 幼少名・熊丸…長野市鬼無里山角の山角城を築城。

以上から考えると、「今井豊成という人物は中原兼遠の子、または今井兼平の子」と考えるのはやや無理がありそうです。しかしながら、婚姻制度が現在と大きく異なる時代のことですから、前にも述べたとおり、兼遠または兼平の正妻以外の女性との間の子どもという可能性もあるだろうと思いますが、これまでに調べた範囲では「今井豊成」という人物は全く霧の中です。情報をお持ちの方がおられましたら教えていただけたら幸いです。

（３）現時点での結論として

以上のデータ等から、『諏訪形誌』の記述にあるとおり、「中原兼遠の子に今井豊成という人物がいて、丸子依田城の義仲拳兵に際して荒神宮に派遣され、武運を祈願したとされています」の「とされています」という記述が妥当なのではないかと思われます。「中原兼遠の子」または「今井兼平の子」という説については伝説の域を出ないものではないか、しかし、縁起として江戸時代の後期には「今井兼平につながりがある今井豊成という人物によって創建された」という話が語られていた、というあたりが妥当な見方ではないかと考えます。

荒神宮創建の伝承について、事実関係にははっきりしない部分はもちろん多く含まれていますが、いずれにしても、源（木曾）義仲に連なる人々との関係があったと思われます。

【コラム 荒神宮にある「今井四郎兼平古蹟」の碑について】

荒神宮と中原兼遠、今井兼平を関連づけるものとして、荒神宮に「今井四郎兼平古蹟」の碑があります。この石碑は建立年は不明ですが、福島安正（松本市出身 陸軍大将 1852（嘉永5）年～1919（大正8）年）が揮毫したもので、大正時代に建てられたものと考えられます。この年代は第29代今井正美さんが荒神宮の別当を務めていた時期でもあり、正美さんと寛克彦（諏訪市出身 憲法学者・神道思想家 1872（明治5）年～1961（昭和36）年）や旧日本軍関係者などとの関連から建立されたものではないか、と推察できます。いずれにしても、この石碑の存在によって荒神宮と今井兼平との関係性を論じることには若干無理があるように思います。



「今井四郎兼平古蹟」の碑

なお、この「今井四郎兼平古蹟」の碑と、現在は失われてしまっている「今井四郎兼光（兼平の兄）」の碑は、現在この碑が建っている場所の北東の石積みの上にあったとのこと。この「石積み」は崩壊の危険があるということで石碑を移設したようで、現在もやや崩れた石積みが残っています。

余談ですが、この石積みの上にあった古木は倒木の危険があるということで、近年切り倒されました。作業に当たった人は「樹齢は600年程度ではなかったか」と話していたそうです。荒神宮が長い歴史を持っていることを示す話だと思います。蛇足ながら、この古木の撤去には100万単位の費用がかかった、とのこと。

3 荒神宮信仰の広がりとは荒神講（江戸時代の荒神宮）

上田地域の江戸時代について知るための大きな手がかりとなるもののひとつが『上田藩村明細帳』別名『宝永の差し出し帳』と呼ばれる文書です。別項で詳しく述べますが、この文書には、上田藩主が仙石政明から松平忠周に代わった宝永3（1706）年に上田領全村で作られたもので、家数、人口、生産高、江戸までの距離などが細かく記載されている貴重な史料です。

この『宝永の差し出し帳』の「寺社」の項の中に「荒神堂」の記載があることから、これが現在の「荒神宮」であると思われます。ここで注目されるのは「神社」または「宮」ではなく「堂」という表現がされているという点です。もちろん「堂」という言葉そのものは「神仏を祭る建物」という意味なので、寺院神社どちらの場合にも使われるわけですが、「荒神堂」は「荒神」を本尊とする寺院であることが一般的なようです。諏訪形の荒神宮の縁起の中にも「荒神像」に触れた記載があります。特に民間信仰の中では、仏教と神道が必ずしも完全に区別することはない、というところがあるのかもしれないのですが、このあたりについてはさらに調査していく必要があるものと思われます。

江戸時代、荒神宮は歴代の上田藩主からも崇敬され、眞田家、仙石家、松平家から例祭には幣帛料を、元和元（1615）年には当時の上田藩主、眞田信之から社領6石1升5合を寄進されたという記録があります。また、あとから述べるように、荒神宮には江戸時代後期、日本全国から多くの絵馬が奉納されており、荒神宮への信仰の広がりは驚くべきものがあります。これらの絵馬は、近在はもちろん、関東方面や新潟、遠くは大阪などから寄進されています。詳しくは「7 荒神宮に残る文化財」で述べます。

【コラム 寛保2年の「戌の満水（江戸洪水）」と荒神宮】

寛保2（1742）年は「戌の満水」「江戸洪水」で知られる年です。旧暦の7月28日（今の暦だと8月28日）から降り始めた雨は8月1日の夜から激しい南風を伴った豪雨となりました。この雨と風によって江戸湾（東京湾）の水位が異常に上昇し、水位が2～3m上昇して下町が水浸しとなりました。さらに、利根川、荒川、多摩川の上流域で発生した洪水が江戸の町を襲って、本所、浅草、下谷一帯だけで900名以上の溺死者が出たと言われています。

この大雨（台風）は現在の上田市周辺にも大きな傷を残しました。『原町問屋日記』『海野町問屋日記』『信濃国小県郡年表』などの文書にも記録が残されています。当時、千曲川は現在の上田駅付近を流れていたようです。小牧村にある瀧澤助右衛門（問屋日記を書いた人）の田畑は冠水し土砂も多少流れ込んだようで、「永荒」と記しています。千曲川筋からの流死者は秋和にある正福寺に無縁塚を建てて埋葬するよう、上田藩主からの指示があり、亡くなった人々のための供養塔「千人塚」は現在も正福寺の山門前にあります。また、寺の境内には上田海野町の縁者が講中を組織し、洪水の4年後に建てた石造の大地蔵尊もあります。

諏訪形の被害について、金子素人さんの『諏訪形史跡めぐり』では「（諏訪形では）家屋5戸流失、32戸砂入、田畑砂入（出典不明）」を記されています。また、今井武雄さんは「荒神宮の境内約3萬坪（約10万㎡）を流失せしと伝ふ」という伝承のメモ書きを残しています。

参考文献：町田尚久「寛保2年災害をもたらした台風の進路と天候の復元」
東京地学協会刊『地学雑誌』 2014年 123巻 3号
金子素人「郷土を知ろう 諏訪形史跡めぐり」

江戸時代後期には、荒神宮の賑わいについて意外な事件が起きています。以下、『諏訪形誌』61ページから引用します。

文化8年（1811）6月、上田町で旅籠業をしている人たちが「諏訪形村の住民の嘉七、政吉、金次郎、曾右衛門の4人が許可を受けずに旅人を宿泊させる旅籠業をしているので調べてほしい」という訴えを、原町の問屋を経由して町奉行所へ申し出ました。これを受けて奉行所から旅籠業関係者に「この訴えが真実であるかどうかを調べるように」という指示がありました。

上田町の旅籠関係者が諏訪形村へ出向いて調査したところ、ちょうど嘉七の家に上州五閑村（群馬県安中市）の旅人8人が宿泊していました。旅人の一人が急病になってしまい、やむなく宿泊させていて、明朝早く出発をする予定だということでした。上田町の旅籠関係者は宿泊をさせた嘉七との間で今後について口上書を取り交わし、この場を済ませました。その後、藩の役人が事実関係を調査しましたが、上田町の旅籠関係者の申し出に対しては何の沙汰もありませんでした。

この事件について、1年後の文化9年（1812）10月に藩の裁定が下されました。その裁定の

場には海野町、原町の問屋や年寄、旅籠関係者、諏訪形村庄屋（宮下周助）をはじめ村三役、隣宿田中宿問屋、小泉組割番、嘉七、政吉、金次郎、曾右衛門の当事者など合わせて総勢27人もの人たちが立ち会いました。その裁定は、訴えられた当事者4人に対し、「今後、旅人を宿泊させることはやめるように」という穏便なものでした。

当時、荒神宮に詣でる「荒神講」という講中が関東各地にありました。嘉七らはこれらの参詣者を宿泊させる「宿坊」のようなかたちでの旅籠業を行っていたのではないかと考えられます。その後、文久3年（1863）3月に荒神宮の社殿が再建され、竣工遷座祭が盛大に行われた時にも、浄財を寄付した講中や信者を諏訪形村内の宿に宿泊させていたことが伝えられています。

この「宿屋事件」から想像できることは、当時「荒神講」がかなり盛んに行われていて、荒神宮周辺の民家でも旅人を宿泊させる「民泊」のようなことが行われていたのだろう、ということです。荒神宮には関東甲信地域のみならず、遠く越後（新潟県）や関西方面からも絵馬の寄進があったことがわかっていて、荒神宮はかなり広く崇敬を集めていたと考えられ、当時の荒神宮の賑わいを感じ取ることができる事件ではあります。なお、この事件で訴えられた4人の中に名前が見られる「（柳澤）政吉」は「徳本上人の名号碑—通称カンカン石」建立の世話人として名前が刻まれている人で、諏訪形のリーダー的な人物であったことが想像できます。

【コラム 諏訪形には宿屋街があった（？）】

2025年、古老のひとりから興味深いお話を伺いました。その内容は

- ・江戸時代、東浦の道祖神前の道の両側には宿屋が並んでいて、なかなか繁盛していた。川も流れていて、規模のちがいがあれ、ちょうど現在の「海野宿」のような雰囲気だったらしい。それらの宿で働いている人もいた。
- ・この道の西のはずれには「枅形」のような屈曲した道路も見られる。

これが事実だとすると、「ちょっとアルバイトで民泊」くらいに考えていた「宿屋事件」は、かなり組織的なものだったということにもなりそうです。

この「宿屋事件」が起きた文化8（1811）年は、諏訪形に大火があった年で、この火災で荒神宮を含めて、当時の諏訪形中心部にあたるかなりの地域が焼失しています。大火災の後『荒神宮別当今井家系略記』によると、安政2（1855）年2月に、竹内八十吉の設計施工によって新しい荒神宮の造営に着手した、とあります。また、八十吉の請負証書や棟札の墨書には「安政4（1857）年に請け負って文久3（1863）年に棟上げがされた」とあります。『諏訪形誌』の記述では、「明治維新も目の前の文久3（1863）年3月に荒神宮竣工遷座祭が行われた」と述べられています。

【コラム 文化8年の大火と荒神宮】

文化8年の「諏訪形大火」について原因ははっきりしませんが、「諏訪形郷土史研究資料 郷土を知ろう 諏訪形史跡めぐり（金子素人著 1997年）」には以下のような記述があります。

文化8年2月、諏訪形の若宮高町の大火により荒神宮の一切と付近の人家20戸全焼。「2月晦日、三方荒神の茶室より出火茶室不残、荒神拝殿本殿かき数17軒？棟数47軒焼失いたし候」（中村御黨覚書帳 文中の「？」は原文のまま）

なお『荒神宮の由来』には「社の隣家より出火」と書かれています。

4 竹内八十吉

新しい荒神宮の造営に関わった竹内八十吉は優れた彫刻家、建築家として知られる人で、上田近辺にも多くの作品を残した人です。八十吉の生涯は不明な点も多いのですが、文化12（1815）年に現在の上田市国分上澤で生まれ、11歳の時に地元で中澤本次郎について彫刻を習ったという記録があります。一時、葛飾北斎の門に入って絵画を学んだともされています。また、江戸、京都に出て修行、江戸浅草茅町の某師匠（氏名不詳）について彫刻を修行し、深川の八幡社で獅子の彫刻を作ったとも伝えられています。

八十吉は上田地域のあちこちに多くの彫刻作品を残していますが、特に太郎山神社や荒神宮の作品が優れたものとして評価されています。以下、上田地域で見ることのできる八十吉の作品を挙げます。

- ・信濃国分寺薬師堂の彫刻（万延元（1860）年）
- ・良泉寺（上田市殿城矢沢）の梅一木造りの椅子
- ・金昌寺太子堂（上田市中央）
- ・荒神宮（上田市諏訪形）
- ・白山比咩神社の隨身（上田市山口）
- ・科野大宮社・子安社（上田市常田）
- ・太郎山神社（太郎山 明治6）
- ・伊波保神社（上田市岩下）の「鯉に乗る琴高仙人」「鶴に乗る丁令威仙人」の脇障子彫刻
- ・堀川神社（上田市下堀）の「黄石公と張良」、「韓信股くぐり」の胴羽目
- ・龍洞院開山堂（上田市蒼久保）の龍、鶴の彫物
- ・願行堂天神社（上田市中央2丁目（大門町））

八十吉の名は、明治24（1891）年に行われた「科野大神宮奉遷式」の参加者名簿の中にも「御火二人」のひとりとして記載されています。八十吉は、明治31（1898）年9月8日に亡くなっています。享年83歳。当時としては長命だったと言えるでしょう。

5 明治から昭和前半の荒神宮

荒神宮第30代別当今井武雄さんが晩年「老生この春療養臥床中、転た（注：ママ）。思起す七十余年の永き世路の事など徒然なるまゝに枕頭に侍りし子、女達に語りしことなどを彼たちの求めに応じ集録、世迷い言にて候ことを敢えて附記する（「この集録について」より）」として残した「老生の妄言（おいのたわごと） 思い出の片々」という私家本があります。これには、明治時代の出来事として、以下のような記述があります。

先考に聞いたこと

明治四十三年（注：1910年）二月二十日、突然木曾源太郎義顕と申す人来るといふ。その人は木曾家二十四世なり。年七十二才と称するも意気旺盛、壯者を凌ぐものあり、語って曰く、我は幕末、平野二郎、青木和泉等と共に大和に尊皇倒幕の義挙に加わりしことあり。後、明治政府に仕え、伊勢国度会府判事となりし事あり。退官後は六百年余のその昔、江州栗津に滅びし木曾一族の後裔由縁の地やその地の人を尋ねて全国行脚をなしつつ、今縁り深き信州上田の荒神宮に詣で、自ら記しし、木曾宣公旧故實、尊王実記、大和生野義挙の記等を奉り、年来の心願を果し又、中原実家今井宅に一泊、故事来歴を語り合い、話し合いたりしが、氏は七十二歳、近々結婚する…（以下略）

荒神宮には「参上神社」の別名があります。志めさん（今井武雄さんの娘・今井正美さんの孫）によると、この名称は「寛克彦による命名」とのことです。また、荒神宮には寛克彦が揮毫した「参上」の掛け軸（右写真）も残っています。当時、荒神宮の宮司だった今井正美さんと寛克彦氏との間では多くの書簡が交わされ、寛が荒神宮を訪れた記録もあります。

『神道竈戸教會趣意書（発行年不明）』には、「信濃國小懸郡諏訪形に鎮座する参上神社は、古來三寶荒神社と稱し、三柱の大神等を奉齊し、竈神として崇敬するもの多く、現今信徒は實に三府二十有餘の廣きに亘り、國內無比の靈社たり」として、「古來靈驗の著しき此荒神宮を發祥の元とし、新に輦輅の下に教會を創立し…」とあり、「神道竈戸教會」を創立しようとする動きがあったことがうかがえます。なお、現在も荒神宮の社務所玄関には「参上神社 竈戸講々元事務所」の看板が掲げられています。

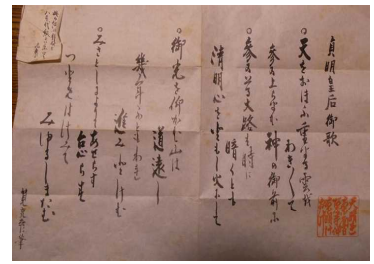


【コラム 寛 克彦】

寛克彦（1872年12月28日～1961年2月27日）は筑摩県諏訪郡上諏訪町（現在の諏訪市）の出身で、独特の皇国史観を主張した法学者です。キリスト教や仏教の研究を経て、「宗教としての神道の信仰が天皇崇拝及び国体の護持に結びつく」という、独特な「古神道」「神ながらの道」を唱えた神道思想家でもあります。東京帝国大学法学部教授や國學院大學教授を勤め、「上杉・美濃部論争」の批判や、「万歳」批判などでも知られています。「皇国運動（やまとばたらき）」という体操を考案し、普及に努めたことも知られています。



前述のとおり、箕と荒神宮の29代別当今井正美さんや30代別当の今井武雄さんと交流が深く、今井家には箕から正美さんに宛てた書簡が多く残されています。また、貞明皇后（大正天皇の皇后）は箕の非常に熱心な支持者で、箕が荒神宮に宛てた書簡で貞明皇后の和歌を贈っている（右の写真）のも、そのつながりによるものと思われます。箕の主著ひとつとされる『神ながらの道』は貞明皇后への進講の記録を内務省神社局から出版したものです。

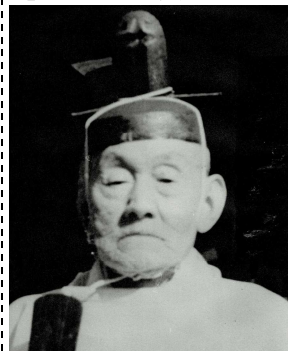


【コラム 「参上神社」の名称について】

西田彰一さん（国際日本文化研究センター プロジェクト研究員・阪南大学非常勤講師・京都橘大学非常勤講師…本稿執筆当時）から「参上神社」の名称について、次のようなご投稿をいただきました。また、西田さんによると上記の『神道竈戸教會趣意書』も箕克彦によるものと見られるとのことです。

「参上神社」と箕が名づけた理由ですが、箕の考えに沿って考えると、建速須佐之男命は成長する神様であり、天岩戸神話でスサノオが天照大御神に会いに行ったことを拡大解釈して、現実世界を代表する神である地上（実際には海を司っていたわけですが）のスサノオが、天上の高天原のアマテラスに会いに行ったことを「参み上り」（まみのぼり）、すなわち「参上」と評価したことから、参上神社と名づけたのだと思います。

【コラム 今井正美さんと今井武雄さん】



荒神宮29代別当の今井正美さん（1874（明治7）年～1961（昭和36）年 左写真）と、30代別当今井武雄さん（？年～1995（平成7）年 右写真）は、明治・大正時代から現代にいたる荒神宮を見ていく上でたいへん重要な人物です。

正美さんは当時の更級郡中津村（現在の長野市川中島町今井周辺）の出身で、1897（明治30）年に今井家の養子となって神職を継いだ方です。長野市今井は、今井兼平の墓所と伝えられる「兼平塚」や今井兼平を祀った「今井神社」、兼平が創建したと伝えられる真言宗豊山派兼平山切勝寺（さいしょうじ）などがある地域で、今井兼平や荒神宮ともつながりが深い地域です。



正美さんと、箕克彦氏、宮内省や軍、旧上田領主の仙石家の人たちなどとの間で交わされた手紙などが多く残されており、正美さんは中央とのつながりも強い有力者だったことが想像できます。神楽の音楽に精通しておられた方のように、57年間に渡って千曲市の武水分神社の楽長（神楽）を務められ、その功績に対して1955（昭和30）年4月28日に武水分神社から感謝状と銀杯を贈られています。また、造形作品などにもその腕を発揮された方で、現在、大黒社の中には正美さんが彫られた木像の自刻像（左写真）が置かれています。

武雄さんは、旧上水内郡中条村（現在の長野市中条）出身で、荒神宮の歴史や文化財などについてまとめ、多くの文書を書き残された方です。1995（平成7）年にお亡くなりになってしまいましたが、地域の皆さんの中には武雄さんを知っている方も多くおられます。ある古老は「とても気さくな人で、近くを通りかかると「ちょっと（荒神宮の）ここを直してくれないか」などと声をかけてくれ、いっしょにお茶を飲んだ」と話してくださいました。また、荒神宮の近くに住んでいる、もう少し若い方は「とても優しいおじいさんという感じの人で、子どものころよく声をかけてもらった」とも話してくださいました。

6 諏訪形・荒神宮と里見弴

太平洋戦争時、多くの文化人などが長野県に疎開してきた記録があります。作家の里見弴は諏訪形に疎開しており、荒神宮に参拝する様子などがその作品中に描写されています。以下、『諏訪形誌』174ページから部分的に引用します。

里見弴（さとみ とん 1888年～1983年）は本名山内（やまのうち）英夫。小説家有島武郎の実弟で、人情の機微に通じた、屈託のない語り口の巧みさが特色の小説家です。

里見は、太平洋戦争末期の昭和19（1944）年5月1日、身のまわりの世話をしてくれる遠藤喜久、家事を手伝う老女とともに諏訪形1011番地の小早川家に疎開し、同年11月まで滞在していました。喜久と老女はその後も小早川家に残りました。

小早川家への疎開を導いたのは、三井（旧姓窪田）うめでした。うめは少女時代から文学に長じていたことから、一時期「女書生」として里見宅に住み込んでいました。



里見弴と遠藤喜久（絵：照井正夫さん）

里見の小説『姥捨』は、諏訪形に滞在していた10か月間に出会ったいろいろな事柄を中心に書かれています。また喜久は、昭和21（1946）年10月31日まで諏訪形に滞在していました。鎌倉に住んでいた里見は、その間ほぼ毎日、喜久との間で手紙を交わしており、それらを収めた『月明の径』も出版されています。これらには、戦中から戦後にかけて諏訪形の人たちの日常の暮らしや、地域で起きた出来事などが記載されているため、当時を知るための格好な資料といえます。

里見は諏訪形滞在中、窪田家の人たちに歓待されたり、また、産土神の諏訪神社や荒神宮の境内で近所の子どもたちと遊びに興じたりしていたことも伝えられています。 以下略

参考文献『上田市誌（上田の風土と近代文学）』

『諏訪形誌』本文には「里見弴は1944（昭和19）年5月1日に女性2人を伴って諏訪形を訪れ、11月まで滞在した」という記載がありますが、誤りであることがわかりました。里見が女性二人と諏訪形を訪れたのは1945（昭和20）年5月1日のことで、この時は数日間滞在しただけで鎌倉に戻っています。里見はその後も何回か諏訪形を（と言うより遠藤喜久（お良）のもとを）訪ねていますが、それほど長期間滞在したことはなかったようです。



また、里見弴の小説『姥捨』の中に、里見自身をモデルとした主人公が近所の女の子といっしょに荒神宮に参拝し、境内で遊ぶという場面が出てきます。この場面について、当時諏訪形に住んでいて、小学校4年生だった丸山廣さんは「小説『姥捨』に描かれているようなことがあり、「女の子」は自分の妹たちだった。その時、自分もいっしょに荒神宮に行ったのだが、小説に登場するのは妹たちだけだった。男の子のことはどうでもよかったのかな？」などと話してくださいました。

7 荒神宮に残る文化財・石造遺物

（1）荒神宮本殿（上田市指定）

前述のとおり、竹内八十吉による建物です。荒神宮本殿は、すべてに檜材が用いられています。三間社流造、唐破風、屋根はこけら葺きで三方に縁をつけ、東西には脇障子が設けられています。軒先の中心には鳳凰の大きな彫刻を配し、四本の柱の上部の貫には獅子、龍、象などの彫刻が施されています。これらの彫刻は華麗で、動きを感じさせる堂々としたものとなっています。また、薄い板で作られた、東西の脇障子や壁面などには、中国の古い史書にある物語などを元にした彫刻が所狭しと並んでいて、それらの精緻な技法には圧倒されます。荒神宮本殿は昭和43（1968）年、上田市指定の文化財となっています。



参考文献『上田市誌・明日をひらいた上田の人びと』

(2) 竹内八十吉の手による荒神宮本殿の装飾彫刻
荒神宮本殿は、正面の大きな拝殿の左を通して奥に進むと見えてきます。

ここでまず紹介したいのは、この本殿にびっしりと群がる装飾彫刻のものすごさです。建物を支えるという本来の機能を見失って柱をズタズタになるまで彫り込む情熱には圧倒されます。

少々マニアックな話になりますが、エウヘニオ・ドールスというスペインの美術史学者が、「人間には、調和のとれた理性的で完璧な美しさに憧れる一方で、おどろおどろしいもの、ゴテゴテしたもの、激情的なもの、ソツとするものなどを本能的に志向する傾向があり、これが時代を超えてしばしば美術の様式として出現する」と述べました。そして、その典型例である17～18世紀ヨーロッパのバロック芸術にあやかり、これらすべてを一括して「バロック」と名付けたのです。日光東照宮などに出現するゴチャゴチャ・ゴテゴテした過剰装飾傾向もその典型と思われ、「江戸バロック」と呼んでもいいのではと私は思っています。そして、諏訪形の荒神宮本殿もその典型といえるのではないのでしょうか。



さて、本殿に群がる彫刻の中で、特に圧巻なのが、東西の側面を飾る群像彫刻です。それぞれ中国古代の伝説を題材にしています。

西側彫刻は、周の武王が殷の暴君紂王を倒した戦いの説話で、武王が殷の武将に槍で襲われたとき、どこからともなく金龍が現れて武王を護ったという伝説が描かれています。龍が描かれているのは、木造建築を火災から守ることを象徴しているとも考えられます。

東側の彫刻は、春秋戦国時代の説話で、豫譲（よじょう ?～ 紀元前453年頃）という男が主君の仇である趙無恤（趙襄子）を討とうと橋で待伏せするも失敗、せめてものけじめにと、豫譲の気概に感じ入った趙無恤の着ていた服をもらい受け、それを3度切りつけたあと自害した、という漢代の史書『史記』記載の伝承に題材を取っています。横山光輝の漫画『史記』でも「義に殉ずる」として取り上げられている逸話です。

これらの題材はもちろん、竹内八十吉オリジナルではありません。当時の神社彫刻でよく採用されるテーマでした。おそらく、それらが水回りに関係するものだからです。龍は、雨を呼び、橋は水辺の付属物です。当時、建築物にとって最大のリスクは火災でした。寺社建築に水に関する装飾が多いのはそのためです。

荒神宮で見ることができる竹内八十吉の彫刻は、精緻で、しかも素晴らしい躍動感と写実性を備えており、その超絶技巧には、驚嘆すべきものがあります。この本殿が上田市指定文化財になっているのも当然といえましょう。



西側彫刻



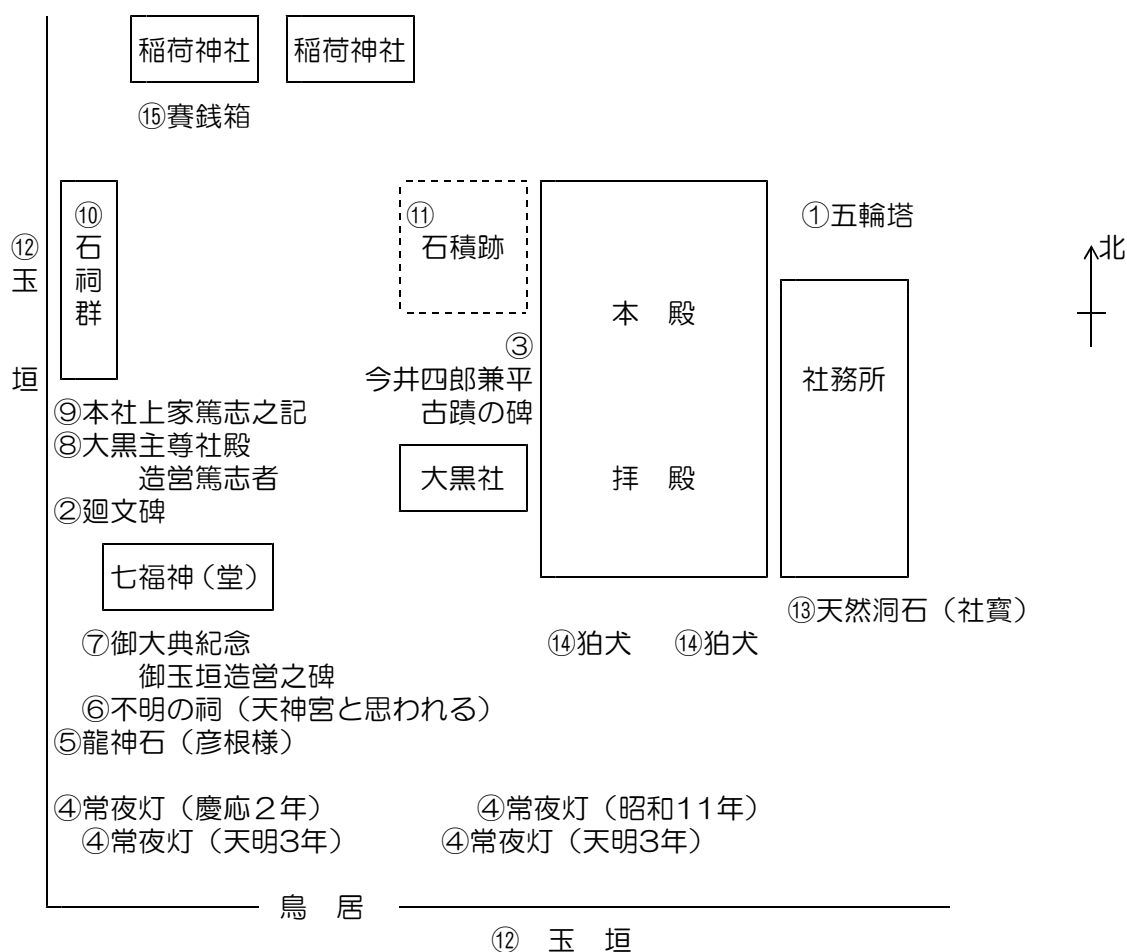
東側彫刻

文と写真：窪田善雄さん（諏訪形誌活用委員会委員） 一部改編

(3) 石像文化財・石造遺物

荒神宮には多くの石造文化財があります。それらを紹介します。

(市神)



①五輪塔（上田市指定）

荒神宮石造五輪塔は神社本殿の右後方（本殿裏手の北東側）、植え込みの高台に安置されています。総高112cm。上田地方としては中程度の大きさで、鎌倉時代の作と思われます。

一番下の地輪は、次の水輪を安定させるために、上面を皿状にへこませてあります。水輪はやや押しつぶされた形状を呈しており、屋根にあたる火輪の軒口はゆるやかな反りがあり、力強く厚手に造られています。火輪の上に載る空輪と風輪は一石でどっしりと造られています。

荒神宮石造五輪塔についての故事来歴等については記録がないのでわかりませんが、木曾義仲の四天王のひとりであった今井四郎兼平に関係のある人の供養塔ではないか、とも言われています。



この五輪塔は昭和59（1984）年に、上田市の文化財に指定されています。

②廻文碑

荒神宮境内、鳥居をくぐってすぐ左手の西側の一角に、高さ1.7m、幅1.1mの「廻文碑」が建てられています。この石碑は、文久3（1863）年の春に、地元諏訪形の荒井助次郎、宮下理兵衛、宮下勝右衛門や、小牧、中之条の人たちによって建てられたもので、力強い草書の文体で彫られています。また、廻文碑は数が少なく、たいへん珍しいものとなっています。

なお、以下の碑文口語訳は『諏訪形誌』編纂当時の城下小学校長塚田量さんによります。



荒神宮境内の廻文碑

廻文碑の正面

すわかたに神の御代にかすさのをのさすかに夜見のみかにたかわす
天廻舎回翁

【口語訳】

この諏訪形の地は神の御代からであろうか、すさのをの尊が、やはり（黄泉の国を支配したすさのをらしく）夜もよく見えてくる美しい泉下に違いない所であろう

廻文碑の右側面

流れ見す閑かきかとの すみれかな
海善寺亀明

【口語訳】

川の流れが見える長閑な雰囲気醸し出している村（社）の角に
ひっそり咲いているすみれだなあ

③「今井四郎兼平古蹟」の碑

荒神宮拝殿の西側に「今井四郎兼平古蹟」と刻まれた石碑があります。この石碑については前述のとおりです。神社関係の方のお話に出てくる「今井兼光の碑」は残っていません。

④永代常夜灯

建立は「慶応二年（注：1866年）丙寅二歳三月吉日」と刻まれています。前述の今井武雄さんによる「老生の妄言思い出の片々」の中に、永代常夜灯について以下のよう記述が見られます。



当宮境内の西隅に高さ二十尺の石灯籠がある。奉納者は上野国多胡郡甘楽郡講中慶應二丙寅二歳二月と刻んである。

多胡郡は現在の群馬県吉井町、甘楽郡は甘楽町と富岡市附近で、此の地方は上信電鉄の沿線、下仁田町から本県の内山峠、佐久市への大昔からの交通の要路即ち上州、信州、関東、近畿地方への道で、殊に両県の物資その他の交流関係多く、県内地名の木曽福島など吉井町甘楽町附近に同じ地名があるのは治承の昔、木曽一族や関係の武者たちが居住したという事に依ると思われる。

また、信州上田荒神宮夜燈の奉納は此の宮が木曽一族中原家今井別当の奉紀の宮であるこの縁故で、木曽一族退散から約六百年余の慶應二年、往時を思い縁りの人々が有志奉納をしたと思われるが、荒神宮にも、吉井町多胡村地方にも何等記録なく、夜燈の話もなく只大昔、木曽一族が住んだという昔話は今に残っている。

この「慶應2年の常夜灯」はたいへん立派な造りで、高名な高遠の石工の手によるものかもしれません。小牧の四箇牧神社にも高遠の石工の名前が刻まれた常夜灯が残っていることから、可能性はありそうです。

もう1基の常夜灯は天明3（1783）年に上州の人たちから寄進されたものです。「天明三年卯

癸」と刻まれています。天明3年というと、旧暦の7月（現在の暦だと8月）に浅間山が大噴火を起こした年です。また、北関東方面と荒神宮との結びつきの強さも考え合わせると、上州の人たちが浅間山の噴火が納まることを願って寄進したものかもしれません。



左図の左上（奥）が慶応2年の常夜灯、手前が天明3年の常夜灯です。なお、慶応2年の常夜灯と対になる東寄りの1基には「昭和十一年四月」とあり、再建されたもののようです。

⑤神籠石（彦根様）

鳥居をくぐってすぐ、本殿に向かって左側（境内南西の隅に近い場所）には「神籠石（彦根様）」と記された石があります。「彦根様」は「子授けの神」ではないか、とも考えられるようですが、実は何なのかよくわかりません。有賀西夫さんは、「先代の別当（今井正昭さん）のころ、珍しい石が出たという話を聞いた。雨ざらしだったので、小屋で覆った」と話してくださいました。



⑥不明の祠（天神宮と思われる）

神籠石（彦根様）の北隣にも石祠がありますが、これが何なのかははっきりしません。諏訪形誌活用員会顧問の北沢伴康さんによると「屋蓋部の両側面に梅鉢の紋章が見られるので、天満宮ではないか」とのことです。左の写真は天神宮と思われる石祠の右側面に見られる梅鉢の紋章です。



⑦御大典記念御玉垣造営之碑

1926（大正15）年に玉垣が建立されたときに寄進をした人の名前が刻まれています。県内外から約290名もの人たちから寄進があったことがわかり、当時の荒神宮信仰の広がりを見せるものと言えます。なお、この玉垣には「参上神社」の刻印があり、玉垣が造成された当時には、荒神宮は「参上神社」と称していたことがわかります。

⑧大黒主尊社殿造営篤志者の碑

その名のとおり、拝殿の西隣にある「大黒主尊社殿」の造営を記念したものです。「大正三年八月」「第二九代今井正美」とあり、寄付者の名前が刻まれています。なぜか一時、この石碑の拓本をとる人が多く、墨を塗ったままになるなどの問題があった人気の（？）石碑、とのことでした。

「大国主大神」と、七福神のひとり「大黒天」とのあいだはかなりの混乱があるようです。出雲大社では「大国主大神」と「大黒天」について、次のように説明しています。

大国主大神には、他にも「大己貴神（おおなむちのかみ）」「大物主神（おおものぬしのかみ）」「八千矛神（やちほのかみ）」「大国魂神（おおくにたまのかみ）」「顕国魂神（うつしくにたまのかみ）」など多くの御神名があります。ただし、いわゆる「七福神」の中の「大黒天」とは、正確には別の神様です。



「大国主」は日本神話に登場する神で、「因幡の白ウサギ」の話のように、豊穰をもたらす優しい神様として描かれます（もちろん、この言い方は単純すぎますが）。一方、七福神の中の「大黒天」は本来、インド密教やチベット仏教の神で、ある意味かなり戦闘的なキャラクターと言えます。



この2柱が「だいこく」という音がかぶることから混同され、習合して、江戸時代ごろには現在のかたちが定着して現在に至っているものと考えられます。また、「食物や財福を司る神」という位置づけから、「竈神」である荒神宮にふさわしい神様とも言えます。

現在の荒神宮別当今井貴美さんによると、荒神宮では「大黒天」と「大國主」は同じものとして扱っている、とのこと。なお、荒神宮では1984年の甲子の年に盛大な祭典が行われたようで、左図のようなパンフレットが残されています。

⑨本社上家篤志之記

1895（明治28）年起工、翌年4月に竣工した荒神宮改築時の記念碑です。碑は、発願者今井石太郎、発起者細川吉次郎（注：上田市の初代市長）ほか8名と寄附をした人たちの名前が刻まれています。

【コラム 細川吉次郎

1861年10月6日（文久元年9月3日）～1924（大正13）年5月25日】

細川吉次郎は信濃国小県郡諏訪形村（現・上田市諏訪形）で吉兵衛の二男として生まれました。生家は代々庄屋を務め酒造業などを営んでいました。松平（しょうへい）学校を卒業後に家業の酒造業から蚕種製造業に転じ、1873（明治6）年上田初の製糸場設立に尽力しました。その後、小県郡蚕種検査所主事も務めました。1890（明治23）年には城下村会議員に選ばれ、1893（明治26）年同村長に就任して、小学校の増築や高等科新設などに尽力しました。

1897（明治30）年には小県郡会議員となり、郡参事会員も務めました。1899（明治32）年から長野県会議員を3期務め、県農会副会長、蚕種同業組合副組合長などを兼任しました。1914（大正3）年には上田町長に推挙されて就任し、1919（大正8）年、城下村と合併し上田市が成立すると初代の上田市長に就任しました。市長として上水道の整備、市有林の造成、公会堂の新築などに力を尽くしましたが、市長在職中に病気によって死去。市葬が執り行われました。

Wikipediaから引用（一部改編）



⑩不明の石祠8基



「本社上家篤志之記」の碑の北側には8基の石祠が並んでいますが、どのようないわれのものかはよくわかりません。当代別当の今井貴美さんのお話だと、各町内会などいろいろなところで管理しきれなくなった祠を預かっているものだろう、とのこと。以前は祝祭日に祠を預けた町内会などが祝祭を開催することもあった、とのこと。

なお北沢伴康さん（諏訪形誌編集委員長・諏訪形誌活用委員会顧問）は、この8基の中のどれかが「ミシャグジ（御左口神、御社宮司、御射宮司、御社宮神 など）」ではないかと考えておられるようです。「ミシャグジ」とは、主に諏訪地域とその周辺に祀られる神霊・精霊の総称であるとされますが、様々な説もあって、何物なのかは特定されたいようです。「ミシャグジ」の祠などは北関東から京都、奈良、和歌山あたりまでに広く分布しており、上田・小県地域にも104社確認できる、とのこと（今井野菊さんの研究に基づく）。なお、北沢伴康さんは、上田民俗研究会機関誌『上田盆地No. 24（1986年刊）』に上田小県地域を中心とした「ミシャグジ」の建立場所についての調査研究を発表されています。

また、一番北側の祠には右の写真のような刻印が見られることから、稲荷社であることがわかります。



⑪石積跡

本殿西側には崩れかかった石積みの跡が見られます。「今井四郎兼平古蹟の碑」で触れたとおり、この石積みの上にも石碑があったものを、安全上の理由から平場に移設した、とのこと。

【コラム 石積み】

荒神宮本殿東側には石積みの跡と大木を切り倒した跡が見られます。今井貴美宮司さんのお話によると以前この石積みの上やその周辺には、何基かの（数は不明）五輪塔が建っていたとのことでした。ただ一時期盗難が多く、五輪塔そのものを倒しておくうちに残念ながら散逸してしまったようです。また、宮司今井家の墓地（現在の市営墓地北側の坂の下あたり）参道にもかなりの数の五輪塔などが建っていたが、盗難などに遭って、現在では一基も残っていないとのことでした。

この石積み跡に上がるのは危険なのでやめたほうが良いと思いますが、石積みの周囲には、右の写真のような、明らかに人の手が加わったものと見られる石（「残闕」と呼んで良いのでしょうか？）が見られます。これらが、かつて五輪塔がここにあったことを示しているものと思われる。



⑫玉垣

「玉垣」は「瑞垣」とも呼ばれ、神域と世俗とを分ける境界のことです。古くは植物で作られた「柴垣」が用いられていたようですが、神籬と磐座・磐境が結びついて石造の垣根などに代わり、現在の神社にみられる玉垣に変わっていったと考えられています。

荒神宮の玉垣は、神社の西側と南側にあり、大正15（1926）年4月に作られた、と刻まれています。玉垣造営を祈念して建てられた「御大典記念御玉垣造営之碑」には奉納者約290人の名前が残っています。それによると、地元の人たち24人のほか、長野県内（長野市・小諸町・その他近隣の町村）や県外（広島市・栃木県・奈良県（3名）・兵庫県・小樽市・横浜市・三重県・愛知県・東京市（2名）・南満州遼陽市・新潟県・和歌山県・神戸市）など、奉納者は日本全国に広がっています。当時の荒神宮が広く信仰を集めていた証になるものと思われる。



なお、「御大典記念御玉垣造営之碑」の項でも触れたとおり、この玉垣には「参上神社」と刻まれた石が見られ、1926年当時には「参上神社」の名称が使われていたことがわかります。

⑬天然洞石（社寶）

ちょっと目立たない場所ですが、拝殿の右（東）側、社務所の入口近くに「天然洞石」が置かれています。「石造文化財」という範疇ではありませんが、「天然洞石」と彫られた石の上に載っている天然石には、貫通した穴があります。この穴を矢で射貫いた、というような伝説もあるようですが（未確認）、この石が何物で、どのような経緯でここにあるのかについては、関係者のお話を聞いてもわかりませんでした。参拝者の馬をつないでおいたものなののでしょうか？



⑭狛犬

拝殿前には一対の狛犬があります。刻印によると、1935（昭和10）年に上田市常入町の関熊吉（「きち」の文字土かんむりに口）という人が奉納したものです。



⑮賽銭箱

「文化財」と呼べるのかどうかは疑問ですが、荒神宮の北西隅にある稲荷社の賽銭箱はなかなかユニークです。「がま口」をかたどったものです。

(4) 奉納された絵馬

江戸時代から明治時代にかけて、荒神宮は大きな賑わいを見せます。「荒神講」も盛んに行われた記録があります。またこの時期、前述のとおり多数の絵馬が荒神宮に奉納されています。絵馬を奉納した願主は近隣の人々のみならず、関東方面や越後（新潟県）、大阪などとたいへん広範囲にわたっており、荒神宮信仰の広がりがわかります。

古老の話では「荒神宮本殿の壁面には数え切れないくらいの絵馬が飾られていたが、本殿を修理する時（昭和27（1952）年から28（1953）年にかけての修理か？）にかなり荒っぽい作業が行われてしまい、残念ながらそれらの多くが失われてしまった」とのことです。



荒神宮全景

（『信濃国上田全図』

明治24（1891）年より）



今井武雄さんの『荒神宮の由来』には「絵馬は数百枚」、『諏訪形の史跡めぐり（金子素人著）』には「絵馬奉納絵馬数100枚、金のわらじ、塩の道の絵馬、その他」という記述があります。

現在も本殿壁には損傷が激しい絵馬が何枚か残されています（左の写真参照）。比較的状態の良い絵馬は現在、荒神宮内に飾られています。

以下に紹介する絵馬の調査は主に、諏訪形誌活用委員会委員（元諏訪形誌編集委員会副委員長）窪田善雄さんによります。

【コラム 荒神宮と北関東】

絵馬の奉納は「荒神講」との関わりも大きいものと思われます。特に、荒神宮と北関東方面とのつながりの強さは目をひくものがあります。本稿でも群馬地域学研究所の手島仁さんからの情報として、今井四郎兼平の一族の者が兼平の死後群馬県へ落ち延びて、前橋市に隣接する旧北橋村下箱田（現在の渋川市）に土着したことを紹介しています。

時代をさかのぼると、木曾（源）義仲の父親、源義賢が上野国多胡（現在の群馬県高崎市や藤岡市の一部）を治めていたという記録もあり、荒神宮と北関東とのつながりは強いものがあったと考えられます。

○「北前船 感應丸」（文政8年：1825）

願主 越後系魚川 寺崎伴右衛門



○「北前船 祥風丸」（文政12年：1829）

願主 越後系魚川 寺崎伴右衛門



○「海上安全」(元治2年：1865 7月)
願主 越後糸魚川 寺崎伴右衛門 政孝

○「北前船 三隻」(元治2年：1865)
願主 越後糸魚川 寺崎伴右衛門



「北前船(千石船)」がかなり写実的に描かれたこれらの絵馬は、越後国(現在の新潟県)糸魚川の船主、寺崎伴右衛門という人が航海の安全を願って寄進したものです。

「北前船 感應丸」「北前船 祥風丸」の絵馬には「吉本善応」の名前が見られます。窪田善雄さんの調査によると、この人は大坂(大阪)の絵師として知られる人です。北前船の航路は、北海道、東北から新潟を経て関門海峡を通り、大坂(大阪)に至るものです。主に日本海沿岸から米穀を浪速(大阪)に回漕し、帰り荷として瀬戸内海の塩を運びましたが、その一部が信州にももたらされています。このようなことから、これらの絵馬は糸魚川の北前船主寺崎伴右衛門が大坂の絵師に依頼して描いたものを荒神宮に奉納した、と考えることができます。なお、北前船が活躍したのは江戸時代中期(18世紀半ば)から明治30(1897)年ごろまでです。

海から遠く離れたこの地の神社に、このような絵馬が奉納されていることはちょっと不思議に思います。民間信仰の上では「荒神」は一切の不浄を清める火の神、竈の神とされています。それがこの、北前船の航行安全とどのようにつながっているのかは定かではありません。ただ、荒神信仰は瀬戸内海沿岸で盛んなことから、海の安全ともつながりがあるのかもしれません。

信濃毎日新聞社刊の『信濃絵馬』には、前ページ右側の絵馬が以下のように紹介されています。

船材の木目まで克明に

順風に帆を揚げて快走する北前船。「感應丸(注：絵馬の記載は「感應丸」)」の船名を染め抜いたのぼりがはためき、船尾に黒紋付き姿で立つ船主。がんじょうそうな船材の木目まできちんと描いた克明な絵馬である。

願主は越後国糸魚川の寺崎伴右衛門、文政8(1825)年の奉納である。荒神宮には、伴右衛門が奉納した北前船の絵馬が5点あるところを見ると、伴右衛門は糸魚川に本拠を持つ大きな廻船問屋だったにちがいない。絵は吉本善応。おそらく北前船の絵をもっとも得意とした浪速の絵馬師であろう。

北前船は、北国船、どんぐりに似ているところから「とんぐり」とも呼ばれた江戸中期の和船。加賀、能登、越後、津軽などから、関門海峡を通り、太平洋岸の港との間で物資を運搬した船のことである。感應丸は日本海から米を浪速に回漕し、帰り荷に瀬戸内の塩を運んだと思われる。その一部は千国街道を馬の背で運ばれ、信州に入ってきた。荒れる日本海での航行の安全祈願のため、伴右衛門はわざわざ浪速の絵馬師善応に頼み、荒神宮に奉納したとみられる。だが、山国信州のお宮になぜ奉納したのかは明らかではない。

感應丸の乗組員は、船主らしい客一人を除くと9人である。この人数から船の大きさを推定するのは困難だ。溶媒として絵馬師が描く克明さとは逆に、商品としての定形も考慮しなければならぬからだ。ふつう北前船は千石船といわれ、いまでいう150重量トンに近い大きさだった。木造でそれだけの船をつくるのはたいへんだった。それだけに安全な航行を神仏に祈願したのである。

民間信仰上で「荒神」は一定の不浄をきらう火の神・かまどの神だといわれている。それが航行の安全とどのようにかわるのかははっきりしない。しかし、荒神宮に奉納された大小さまざまな絵馬は、三重、静岡あたりのものまであり、信仰圏が広範囲だったことを物語っている。信仰の対象もさまざまであり、北前船一糸魚川一上田一荒神宮のつながりも伴右衛門の個人的な尊信とみられないだろうか。

注：文中で用いられている数字は漢数字のものを算用数字に書き直してあります。

注：本文中に「荒神宮には、伴右衛門が奉納した北前船の絵馬が5点ある」とありますが、現在までの調査では4点しか見つかっていません。

注：『信濃絵馬』は1976（昭和51）年に限定1500部刊行された豪華本で、荒神宮の所蔵するものには「355番」の記載があります。定価は29,000円と、当時としてはかなりの金額です。



やや時代は下りますが、左の絵馬「一文銭三重塔」も1894（明治27）年に大坂府河内國石川郡富田林村（現在の大阪市富田林市）の住人、武田重太郎から寄進されたものです。これも北前船によってもたらされたもののなのかも知れません。

○「文書く女」（安政5年：1858）
願主 信州高遠藩 山下虎五郎 無賢母



○「九尾の狐と妲己の夢を見る男」（年代不詳）
願主 高井郡高井野村堀之内組 藤澤前太夫



左の「文書く女」または「歌仙」は現在の伊那市高遠町の人から寄進された絵馬です。和歌の上達を祈念して奉納されたものでしょうか。この女性がだれなのかわかりませんが、六歌仙のひとり、小野小町ではないか、とも言われています。

右の「九尾の狐と妲己の夢を見る男」は現在の上高井郡高山村の人から寄進された絵馬です。願主（右側で寝ている人）は、体調不良の原因は誰か（左に描かれた人物）に呪われているのではないかと考え、絵馬を奉納して快復を願ったものではないかと思われます。

○「壇ノ浦合戦 源義経 八艘飛び」(安政4年：1857) 願主 武州 豊島郡関村 子 講中



この絵馬は、次に紹介する2枚の絵馬同様、武州豊島郡関村、現在の東京都練馬区関町の住人から奉納されたと記載されています。

○「15名(男9人女6人)の参拝団体」 武州豊島郡関村 安政3巳年 3月 吉日
参詣者は 健蔵 八十吉 伝次郎 そめ 関五郎 さの たま かね せと 栄蔵
源太郎 熊吉 多五郎 みゑ 吉五郎



「武州豊島郡関村」は現在の東京都豊島区に隣接する練馬区関町のことと考えられます。「安政四巳年」は1857年で、前述のとおり荒神宮は文化8(1811)年の火災で焼失していて、安政2(1855)年2月から竹内八十吉らによって再建工事が始まって、竣工したのは文久3(1863)年なので、この人たちが参拝した当時は、堂宇は再建途上だったはずで、この絵馬に描かれている荒神宮は、江戸の絵師による「想像上の荒神宮の図」ということになります。

この時に参拝した人たちの中の何人かが再び荒神宮に参拝しているようです。次の絵馬にはかね(可禰女)と嘉五郎(吉五郎)の名前が見られます。



○「三寶大荒神」文久3年癸亥年 武州豊嶋郡関村
願主 多(多)加女 可祢女 吉五郎

文久3年は荒神宮が再建された年ですから、(代参でなければ)この人たちは荒神宮の新しい堂宇に参ったということになります。2枚の絵馬を比べると、描かれた荒神宮の堂宇はよく似ていることがわかります。また、2枚目には後背に海のような景色が描かれ、帆掛け船なども見られます。この絵を描いた人が「荒神宮は(千曲川という)大河のほとりにある」ということを知っていて、想像で描いた、ということなのかも知れません。



越後国頸城郡長者原村(現在の新潟県上越市本長者原と思われます)の山田●之助から奉納された絵馬。題材ははっきりしませんが、「源平の戦い」での熊谷直実を描いたものではないかと思われます。
※上の「●」は読み取れない文字

【コラム 熊谷直実と平敦盛】

「源平の戦い(一ノ谷の戦い)」で熊谷直実(絵馬では左側の武士)は、波際を逃げようとしていた平家の公達らしい騎乗の若武者を「まさなうも敵にうしろを見せさせ給ふものかな(卑怯にも!」

敵に後ろをお見せになるのか)」と呼び止めて一騎討ちを挑む。直実が若武者を馬から落とし、首を取ろうとすると、ちょうど我が子、直家ぐらいの年齢の少年だった。直実が「物その者で候はねども、武蔵国住人、熊谷次郎直実（大した者ではないが、武蔵の国の住人、熊谷次郎直実だ）」と名乗った後、敦盛は「名乗らずとも首を取つて人に問へ。見知らふするぞ（私が名乗らなくても、首を取って誰かに尋ねてみよ。きっと知っている者がいるであろう）」と答えた。これを聞いて立派な武士だと感動した直実は一瞬この少年を逃がそうとしたが、背後に自分たちの味方の手勢が迫ってくる。たとえ自分が少年を逃がしたとしても、どのみち生き延びることはできないだろうと考えた直実は「同じくは直実が手にかけ参らせて、後の御孝養をこそ仕り候はめ（同じことなら直実の手におかけ申して、死後のご供養をいたしましょう）」と言って、泣く泣くその首を斬った。

その後、首実検をするとこの公達は平清盛の甥、平敦盛と判明、齢17だった。討ち死にの折に帯びていた笛「小枝（さえだ）」は、笛の名手として知られた敦盛の祖父・忠盛が鳥羽上皇から賜ったものだという。これ以後直実には深く思うところがあり、出家への思いはいっそう強くなったという。

『平家物語』より（Wikipediaから引用）



○「御幣雲と松」（明治35年:1902）

表 願主 登?松楼 前● 俳句 二句

裏 願主 坂城町出店 上田町遊郭 荒井八五

郎

○奉納 東京府神田●錦町1丁目
岡村茂太郎 同里 永井金太郎 同●
岡村●● 同竹二郎
明治参拾四年七月二拾●日

上の絵馬に見られる「東京府神田●錦町」は、現在の東京都千代田区神田錦町です。



○明治36年9月吉祥日
願主 卯ノ年 男 丑ノ年女



(裏面)

○明治参拾四年拾月●●吉日
三重県阪南郡浦野村仁柿(?)
森下尚吉納
保管料●●円也



由来などについての記載が見られない絵馬



明治 十一 五月 九日	埼玉懸下 第貳大区七小区 武州●房郡小楠村 第五十三番地 梅	願主 山下吉五郎 外二 子供百十人中
----------------------	---	--------------------------

右下の白い部分に記載されている内容です

上の絵馬も埼玉県の下山吉五郎という人から奉納された、『史記』を題材とした絵馬です。なお、奉納した人の住所は「埼玉懸下 第貳大区 七小区」となっています。これは初期（明治7（1874）年～明治22（1889）年）に使われていた行政区画「大区・小区制」で書かれていることも興味深い点です。

また、「願主 山下吉五郎 外二子供百十人中」とはどういう意味なのでしょう？もしかしたら、埼玉県の小学校（？）の山下先生が子どもたちの健やかな成長を願って荒神宮に絵馬を奉納した、ということなのでしょう？そう考えると、この絵馬に描かれたストーリーも納得できるものかもしれません。

【コラム 黄石公張良】

この絵馬は、中国の歴史書『史記』に書かれている、張良（ちょうりょう 紀元前186年没）と黄石公（こうせきこう 生没年不詳）との出会いの場面を描いたものです。張良は、秦末期から前漢初期の軍略家で劉邦に仕えてその覇業を大きく助けた人で、蕭何、韓信と共に「漢の3傑」とされる人物です。

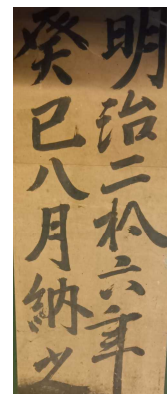
さて、張良が始皇帝を暗殺しようとして失敗し下邳（かひ 中国江蘇省の北端にある邳県の古名）に身を隠していたある時、ひとりの老人と出会いました。老人は自分の履きものを橋の下に落として、張良に「拾え」と命じ、張良は怒らずそれに従いました。絵馬はその場面を描いていると思われます。老人は一度は笑って去りましたが、すぐ戻ってきて5日後の朝に再会を約束しました。

5日後、先に来て待っていた老人は、日が昇ってから現れた張良に「目上の者との約束をしておきながら遅れてくるとは何事か」と叱り、また5日後に会う約束をします。5日後、張良は日が昇ると同時に約束の場所へ行ったものの、老人は既に来ていて以前と同じことを言います。3度目には張良が日の昇る前に行くと言われ老人は後から来て、「その謙虚さこそが宝である」と言い、張良に「太公望兵書（六韜）」を与え、「お前はこの書を読めば10年後には王者の軍師となるだろう」と告げます。さらに隠者は張良に兵書を授ける際、「お前は13年後に黄色い石を見つけるだろう。それが私なのだ」と予言します。

その後、張良は偉大な軍略家となって活躍しますが、13年後、済北の穀城（現在の山東省聊城市東阿県）で老人の予言どおり黄色い石を見つけ、後々まで大事にしたといわれています。このことから、隠者を黄色い石のお方、つまり「黄石公」と呼びます。なお、黄石公は太公望とともに兵法の祖として仰がれていて、その名を冠した兵法書の種類は多く、中でも『三略』が有名です。

この伝説は、日本でも好んで美術や文学の題材に取り上げられています。特に能の「張良」や小林永濯の絵画などでよく知られています。

参考文献：ColBase（国立博物館所蔵品統合検索システム）
Wikipedia



鏡を貼った絵馬

古来から鏡は、神や精霊などの超自然的力や神秘的な力にはたらきかけ、種々の願望をかなえようとする呪術性があるものとされているため、「絵馬」に用いられることも理解できるものと思います。愛知県の鳳来寺では、ご本尊の薬師如来に祈願する時に鏡を奉納する「鏡絵馬」の習わしがある、とのこと。

参考文献：『郷土の絵馬（1975年上田市博物館刊）』



○奉納

明治二十年

越中国射水郡 出木田村

西岡健太郎

（裏面）

明治二十年四月二十日献上

※注：「献」は旧字体

※注：旧射水郡に出木田村の名称は見あたらない

○奉納

明治廿二年十一月十日

願主午年高木庄治郎

2025年、諏訪形誌活用委員会が荒神宮氏子の皆さんの協力を得て、荒神宮拝殿地下室を調査したところ、かなりの数の鏡などが見つかりました。これらも奉納されたものであると思われます。



【コラム 七福神堂】

荒神宮の鳥居をくぐって西側、「大典記念御玉垣造営之碑」の隣に「七福神堂」があります。比較的新しいもので、今井正美さんが別当のところに建てられたということなので、大正時代でしょうか？中にはもちろん、七福神が祀られています。

七福神はほとんどが外来の神様で、しかも神社にも寺院にも祀られていて、何か不思議な感じがしますが、このあたりが「神仏混淆」のおもしろいところ、懐の深さと言えるのかもしれません。



8 現在の荒神宮

「荒神宮由来記」に記載されている行事として『諏訪形誌』に記載されているものは以下のとおりです。

1月 1日	歳旦日	4月10日	春季祭と御幣祭
1月 2日	御幣講祭	7月15日	祇園夏越祭
1月15日	御幣講祭	10月15日	保存会講祭
2月節分日	追儺祭	11月 1日	新穀祭
2月甲子日	甲子七福神	12月31日	大祓いと年越祭

これらの行事の中で、現在、日常的に行われているものについて紹介します。なお、本項は諏訪形誌活用委員会委員長（元諏訪形誌編集委員会副委員長）柳澤公一さんによります。

（1）歳旦日、二年参り、初詣

12月の中旬になると、世話人会の人たちなどがしめ縄を作り、月末には飾り付けをした後、「門松」「茅の輪」を設置し、境内を清めます。12月31日からは参拝者に無病息災を祈るための「人形（ひとがた）」を渡します。参拝者はこの「人形」を使ってまず、自分の体をなでます。その際、悪いところがある人はその部分を念入りに。その後、「人形」に息を吹きかけます。これによって、罪や穢れが「人形」に移ります。その「人形」は「お焚き上げ」をすることで、悪いものを祓うことになるという祈祷です。



また、「茅の輪（ちのわ）くぐり」は、次の写真のような、茅や、茅の代わりとなる藁で作られた大きな輪をくぐることで、身を清め、無病息災や厄除け、家内安全を祈願します。その方法は次のとおりです。

- ①茅の輪の前に立ち、本殿に向かって一礼します。
- ②茅の輪を左足でまたぎながらくぐります。茅の輪の左側を回ってから正面に戻って一礼します。
- ③次は、茅の輪を右足でまたぎながらくぐります。その後、茅の輪の右側を回ってから正面に戻って一礼します。
- ④もう一度、左足から左回りをし、正面に戻って左足でまたいでくぐり、拝殿へ行って参拝します。



茅の輪くぐり（『諏訪形誌』より）



茅の輪

（2）節分日 追儺祭（ついなさい）

節分会2月の節分の日には神社の世話人、年男、年女が集い、神事（玉串奉奠）を執り行います。その後、境内に集まった沢山の人たちに豆まきをします。子どもたちは大喜びです。また、会員には講金のお返しとしてお札、節分豆枰、赤飯などが配られます。



（3）大祓祭（おおはらえさい）

7月初旬に行われる「大祓祭（おおはらえさい）」は、以前は祇園夏越祭と称していたものです。正月からの半年間にたまった穢れを祓い清めるための神事が行われます。ここでも前述の「人形」が渡され、体の悪いところや心配なところに当てて無病息災を祈ります。

節分会（『諏訪形誌』より）

(4) 秋季例大祭

10月中旬に行われる「秋季例大祭」は、以前は「保存会講祭」と呼ばれていたものです。会員の皆さんの家内安全、火防、交通安全、疫病終息の大祈願祭として神事が執り行われます。追儺祭と同様に、会員には、お札、お守り、御神酒、紅白饅頭が配られます。

以上日常的な祭、行事を挙げましたが、その他、必要に応じて行われることもあります。これらの行事を実施するために「荒神宮世話人会」が組織され、その役員が推進役となって執り行っています。現在の「荒神宮世話人会」は今井貴美宮司の下、顧問1名、荒神宮保存会長1名、祭祀実行委員長1名、事務局5名、幹事6名、環境整備6名、三好町代表4名、中村代表2名となっています。

【資料 荒神宮の由来】

注：この文書は1985（昭和60）年に今井武雄さん（荒神宮30代別当）の手によって書かれたもので、荒神宮の鳥居付近に設置されている「荒神宮 参上神社由来」とは別なものです。

荒神宮の由来

御祭神 建速須佐乃雄命
合殿神 興津比古命
興津比売命

我国の神々は、それぞれの御徳を持分け給ひて、国土経営国運隆昌と各家の安全繁栄を守奉る。当社御祭神は天照皇大神の御弟神に坐して、健く雄々しく大神の御許天上に参上りの時、勇往邁進の御行ひあり、其御神威に人々は恐れ畏み、世の騒がしきは静まって、平和と幸を招くを教え預け給ひた、又比古、比売神は生活の根本火食の法を示し、又火鎮の御徳を現して各家の中心に位する、かまどを守護子孫繁栄の恩頼と生活を司る大神に御坐す。

◆ 鎮祭と災害の変遷

本社創建は不詳であるか、治承四年夏木曾義仲は、高倉宮以仁王の命旨を承り平家追討の義兵を当国依田の里に挙げた時、木曾に住む中三権守中原兼遠は一族を引具してこれに應じて、出陣のときその子今井蔵人に木曾義仲の荒神神像を託して、木曾一門の武運を祈らしめた。

その後、木曾義仲歿後中原兼遠の女である、巴御前は、尼となって当所へ来り潜居の親故の人に会ひ、出軍以来の始末を物語り、改めて社を造って荒神宮を祀った。世の遷移に伴ひ、栄枯盛衰を重ねつつも、今井一族は社を護って別当職として、代々奉仕、御社頭の繁栄につとめた。鎌倉時代もすぎて大いなる戦乱もない治世となったので、次第に御社も世に知られて、庶人の生活に基く荒神信仰篤く、自国他国普く利生を仰ぐ参詣賽者多く、神楽の鈴の音絶ゆることなし云々と伝う。（以上は25代別当今井兼春の記す由来記と上田往来及び木曾宣公旧故実（木曾家の後えい木曾源太郎著書）による。巴尼は越後友松の里に住み宝治2年9月9日才で歿す法名あり）

関ヶ原戦後、徳川の治世となって、添加は静まり庶人落付いて生活出来る時代となり、代々の上田城主（仙石、真田、松平氏）も信仰篤く寄進奉賽あり、世人の信仰又深く多く、殊に江戸、北関東、桐生、高崎、富岡地方より、講中代参者多く、殊に群馬県、甘楽町、吉井町、多胡地方に木曾、福島などの村ありこの地方に其昔治承年中木曾義賢一族の居住地であった縁故によって当宮へ諸寄附や石造の常夜灯の寄進もあった。寛保2年8月2日千曲川上流の集中洪雨のため氾濫、大洪水のために上田町南岸地方は、人家田畑の流失多大、殊に小牧村、中村は全戸流失現在の地に移住したといふ（仙石文書）。このため当社も、社地3万坪の大部分を失ひ、災害を受けた。又文化8年2月29日夜の4ツ時、社の隣家出火、荒神宮の一切と附近の人家20戸全焼、仮遷坐を行った（諏訪形村長百姓今井万兵衛其他より火災による救済方を藩役所へ願出書りこれによる）。

この火災より8年を経て、文政2年6月仮拝殿竣工（屋根瓦の銘）安政4年現本殿再三建に着工、村内、上田地方、東京、北関東地方に及び信者の浄財を得て、文久3年3月15日竣工遷坐祭執行（大工棟梁竹内八十吉宣吉の請書と棟札による文化の火災より安政の着工迄60年をけみした）、盛大な月余に渉る祝祭のため、附近の農家はにわかに参詣宿となったので、上田宿の旅籠組合より無許可営業であるとして藩の役所へ訴へたという。世は明治と改り諸変革に伴ひ、社の経営も困難し別当家の私財も失ひ社地も1500坪余となつたが、荒神信仰の古い伝統と尊い神徳の恩頼によって、再三度御社頭も賑わしく、大正11年10月神宮奉祭会長藤岡好古氏祭主と

なって、東大名譽教授法学博士筧克彦氏の研究により御祭神の天上に参上りの神事によって参上の宮と称奉って報告祭を斉行した。

明治、大正の時代は陸、海、空三軍の将官又旧公卿30氏等の参拝賛助、鷹司氏の大幟奉納、其他諸名士、県内外の篤信者の賛助、参拝する人多く社頭は賑わった。昭和の大戦中は出征軍人家族の参拝参籠多く当宮は一百度祓での行事を斉行軍人と其家族の安全祈願祭を行ひ続けた終戦後の昭和27年3月拝殿と附属建物の改築に着手、用材は旧御料林、払下げの本曾檜材28年10月造営竣工、この新築資金は地元区内、上田市其近郷、県内外の篤信家又荒神講員等600余名の浄財寄進による、其寄進者各位の御芳名は記録して本宮内に納め永代保存しその御志を謝し奉り年毎に感謝祭を行ふを例とする。

引続き各位の御篤志を仰いで神徳講代参講福神講を結成して広大無辺の神恩と社会の恩とに報ゆるため平和な世をつくる集ひを行ふ為、又当宮護持保存の為御賛助諸彦各位のご入会を乞願ひます（本宮は内務省令により明治4年4月長野県神社明細帳に登録）。

昭和60年正月

信州上田市諏訪形
荒神宮 参上神社
30代 別当敬白

◆ 指定文化財

- 本宮杵棟（名工竹内八十吉宣吉作）
徳川時代唐様建築物
- 五輪塔、鎌倉室町期の石造塔
- 境内の櫟の樹林 樹種保存林指定
- 奉納絵馬数百枚、金のわらじ、塩の道の絵馬、其他

◆ 祭 日

- 1月 1日 歳旦祭
- 1月 2日 御幣講祭
- 1月 15日 全 上
- 2月 節分日 節分ついな祭
- 2月 甲子日 甲子七福祭
- 4月 10日 春季祭と御幣祭
- 7月 15日 祇園夏越祭
- 10月 15日 保存会講祭
- 11月 1日 新穀祭
- 12月 31日 大祓と年越祭

（出張諸祭事、宮参り、祈禱其他諸祭の奉仕を致しますので申込下さい。
電話（22）0863番）

注：原文は縦書きで、数字は日付や電話番号以外は漢数字
改行や字下げは編者によります

【資料 荒神宮別当今井家系略記】

荒神宮別当今井家系略記

此の家系略記は21代今井隼人兼文の書き
残した文書を原文通りに転記

祖先	今井蔵人豊成 治承4年源義仲依田表出陣に従属したが有故て諏方形に潜居し て毬石右と伴称す 後今井に復す今井兼平の二男、中三権頭の孫	注 「毬石右」の部分 は文字がはっきり 読めない
2代	今井兼信、幼名共若、蔵人豊成の長子 以下14代まで世代の儀古書焼失により不詳	

14代 15代	今井伊勢守兼近、豊成の裔孫武田信玄に従属す 今井伊賀守兼森 弟長治郎兼春元和元年大坂城にて討死	元和元年は「大坂夏の陣」の年
16代	今井小四郎集信	文化8年は現在の荒神宮周辺で大きな火災があった年
17代	今井伊賀守義訓養子継家系	
18代	今井豊秋名字を八木沢と称す暫にして旧姓に復す 吉田家許状残存す写し通り	
19代	今井駿河巫女 但女戸主、巫女の許状存在即移し通り	
20代	今井彦右衛門兼則 吉田家許状存在写し通り	
21代	今井隼人兼文 但此世代の文化8年荒神宮社殿並自宅一切焼失	
22代	今井隼之介包春 吉田家許状在神紙管領より木綿手繰の許を受く	
23代	今井隼人中原兼興 文化年間中焼失の荒神宮の本殿及び附属の建造物の再建を計り 名工竹内八十吉宣吉の設計施工により造営に着手す安政2年2月なり	
24代	今井彦衛右衛門 社殿再建に努めたが若年死去	
25代	今井隼之介 再建費募金のため旧縁故者の多い群馬県吉井町多胡富岡下仁田各地に出張募金に努む	
26代	今井彦七 再建費調達のため藤岡に滞在中	
	明治21年2月同地において客死す	「やい」の「い」は「以」の崩し文字
27代	今井増太郎 明治17年2月死去、24才、女2人みつ、いし	
28代	今井石太郎 別家今井万兵衛子、増太郎死去により本家に入り家職を継ぎ本社再建に尽す。子やい26代より祭事は雇神職宮下祇憲行ふ	
29代	今井源吉、正美と称す。妻みつは増太郎の女 明治30年今井家養子家職を継ぎ神職として荒神宮の諸祭事を復興して神徳の普及信従講中の結集に努めて年毎に信仰者の増加の多きを計って本宮の興隆に尽した功績多しと云ふ	

- 武田信玄の孫、木曾義訓今井家養子のこと
文化8年2月荒神宮大火の時の当主今井隼人の
文書に曰く、武田信玄の三女木曾義昌に嫁ぎ長子は
大坂城にて討死義春と称す二男は佐久に
住す三男義君は巴系を継ぎ今井別当家17代
養嗣家職を継ぐ
(別紙文化8年6月今井隼人文書)

「大坂」は原文のまま

附記 此の家系略記は文化の大火に荒神宮別当宅
其他一切の建物と財物を焼失のため調査の為
見るべき頼るべき何物もなく只火災時の当主の
書き残し文書と其後の文書と郡史によって不備乍
ら概要を家系略記とする

この『今井隼人文書』
原本の所在は現在不
明

昭和63年3月 30代今井武雄記す

「今井記す」と書か
れた後、横に「武雄」
の文字が加えられて
いるようです

※原文は縦書きで数字はすべて漢数字です。改行は原文と同様になってい
ます。

資料中の --- は元資料のページの切れ目です。

また、元資料はマス目のない原稿用紙に書かれています。